2014 午年インタビュー

煌めき

獣医師

伊藤 桃子先生

日本でただ一人 馬の歯医者さんの挑戦

今、この場で治療しなければ

「ガリガリガリ、ゴリゴリゴリ」

岩を削るような太く、低い音が厩舎にこだまする。

「馬の切歯は咬合面が一致しているのが正常ですが、この子は切歯が前に出てしまっています。少しでも良くなるように削って噛み合わせを調整しているところです」

患者ならぬ〝患馬〟を見つめながら話すのは、日本でただ一人、馬の歯科治療に取り組む獣医・伊藤桃子先生だ。歯鑢（しろ）と呼ばれる持ち手のついたやすりを切歯に当て、力を込めて手際良く前後に動かす。「こんなに歯が伸びて口内炎だらけだよ」「口開けといてね」と優しく声をかけながら。

馬が変わる

馬の歯は毎年3～4㍉伸びる。切歯で草を引きちぎり、臼歯で右臼のようにすり潰す。自然と磨耗すれば問題ないが、均等に磨り減らず、歯の変形や咀嚼障害を引き起こすこともあるという。多いのが臼歯の一部が矢尻のように鋭利になるエナメル尖だ。口腔内を傷つけることから、メンテナンスで形状を整えなければならない。

鋼鉄製の開口器で固定し、口の奥に手を入れる。触診と目視で病状を確認し、歯鑢で研磨する。目の粗さを変え、何度も手で感触を確かめながら調整する。追求するのは1㍉以下の世界だ。

手の甲には擦り傷が絶えない。切歯は特に硬く、治療には工業用の研磨機を使うこともある。力仕事に息を切らせながら、一対一で懸命に馬と向き合う。

馬とはいえ、歯間に食べかすが詰まれば歯肉炎やむし歯を発症する。そんな時は必要に応じて鎮静剤を使い、抜歯や抜髄、充填、修復まで処置する。人間と遜色ない治療だ。

「馬は痛みに強い動物。それでも放置して重症化すれば、食欲がなくなったり、落ち着きがなくなったりします。口のなかを触ろうとすると最初は嫌がりますが、治療している間におとなしくなるんです。痛みを取ってあげられることが何よりの喜びです」とうれしそうに。

治療を受けた馬は、食べ方が変わって体重が増えたり、手綱のハミ受けが良くなったり。馬主からは「馬が変わる」と好評だ。

三重県鈴鹿市の「ベルホースファーム」で治療する伊藤桃子先生。工業用の電動やすりで白煙を上げながら切歯を削り、噛み合わせを調整する。「20分ぐらいで治療しないと馬も疲れちゃうので」と話しながら、素早く丁寧に治療する。

【プロフィール】

いとう・ももこ

1975年生まれ。愛知県出身。2003年にEQUINE BODY WORKER認定。05年にNZ EQUINE DENTISTRY SCHOOL修了。11年に北里大学獣医学部を卒業し、獣医師国家資格取得。同年5月、せりの馬診療所を開設し、現在に至る。

時間を共有

馬との出会いは、アメリカで過ごした小学校時代にさかのぼる。学校の隣で飼育されていた馬に漠然とした憧れを抱いた。帰国して接することはなくなったが、馬への思いは消えず、馬術部のある大学を受験。進学先の名古屋大学で馬術に打ち込み、全国大会で準優勝するまでの実力を身に付けた。

卒業後は地元・愛知県の大手自動車メーカーに入社。部品を仕入れる調達部で時間に追われる日々を過ごした。救いになったのが、休日の馬術練習だ。

「馬は草食動物でのんびりした性格。一緒にいると同じ時間を共有している気がして落ち着きました」

それでも、納入業者に徹底して値切りを迫る会社の方針に、「私は何をやっているんだろう」と心をすり減らし、別の道に進むことを決意。入社から5年が経っていた。当時を振り返り、「今の仕事と違って、思えば誰からも感謝されていませんでした」と苦笑いする。

獣医の道へ

退職後は、オーストラリアで馬のマッサージ師の資格を取得。来日した外国人歯科技師（デンタル・テクニシャン）の通訳をするなかで、歯科治療の重要性に気づいた。ニュージーランドで歯科技師の勉強を重ね、見事合格。現地で修行に励んだ。

歯科治療には獣医との連携が不可欠だ。鎮静剤を注射するにも獣医を呼ばなければならない。海外では獣医数が豊富ですぐに現場に駆けつけてくれるが、日本ではそうはいかない。

「今、この場で治療が必要なのに、獣医と日程を調整しなければならないことがもどかしくて」。痛みに苦しむ馬を前に悩んだ。

十分な歯科治療をするには、獣医になるしかない。馬術部時代の獣医の勧めもあり、一念発起して挑戦。大学の獣医学科で6年学び、35歳で新たなスタートラインに立った。

説明を徹底

今は育児で仕事量を制限しているが、多い時で年間3千頭を診察・治療した。自宅のある愛知県豊田市から各地へ飛び回り、競走馬から乗用馬まで診療を続けている。心がけているのは、「馬主が納得できるまで説明をする」こと。口コミで評判が広がり、休む日がないほどの依頼が舞い込んでくる。サラブレッドを育てるベテラン厩舎からは、所属馬の診療を一任されるようになった。

「明日は信楽、明後日からは淡路島です。この前は川崎競馬場で馬の歯について講習してきましたよ」

多忙を極めるなかでも、生き生きと話す姿が印象的。

養成の場を

日本の馬の歯科治療は、欧米と比べて「30年遅れている」と言われている。約9万頭の馬に対し、国内で専門的な歯科治療に取り組んでいるのは獣医1人、海外で資格を取得した歯科技師2人の計3人しかいない。歯科治療の大切さが十分に伝わっておらず、「食べるのが下手だと思っていた」と歯の問題が見過ごされていることも多い。未熟な出稼ぎ外国人歯科技師が治療し、歯を削り過ぎて馬にダメージを与えているケースもあるという。

目下、自身が学んだニュージーランドの教科書の翻訳に取り組んでいる。

「国内で馬の生体や口腔内の構造をきちんと学び、治療できる人を養成しなければなりません。将来的には、そういう場をつくることができればと思っています」

そう言って馬を眺めるまなざしの奥に、馬の命と健康を守る医療人としての確かな信念がのぞいた。